

# まぼろしの前方後円墳「芝山古墳」 スカウトされた継体天皇と河内馬飼集団

南 光 弘

一・まぼろしの芝山古墳とは、

二〇一二年七月八日、NHKがスペシャル「知られざる大英博物館」というタイトルで、ウイリアム・ガールランドコレクションを紹介した。その中で、東石切町にあった今は破壊され失われた芝山古墳（標高約八〇m）が取り上げられていた。内容は、調査記録から、大英博物館の科学調査部による出土品の復元、日本との合同調査団による古墳の内部の様子、二つの棺と須恵器高坏の配置などが再現された貴重な映像だった。

実は、明治の初め大阪造幣局に冶金技師として、招聘されたウイリアム・ガールランドは、見瀬丸山古墳など日本各地の約四〇〇の古墳を訪れ、調査している。その中で、芝山古墳についての調査記録は、精緻をきわめて学術的にも優れたものとして評価されている。また、副葬品の殆どをイギリスに持ち帰り、後に、大英博物館に寄贈したという。

ウイリアム・ガールランドの報告文では石室中央部に**木棺二基**有り、周囲に**直刀二、短刀一、鉄鏃、馬具類**（杏葉、雲珠、轡・鐙・尾錠）、**玉類一〇八個**（ガラス製七〇九一、**銀製十七**、土製一二三、滑石製一三三、碧玉製四一、勾玉三、その他水晶・琥珀・瑪瑙製など）、須恵器の器台など一六個という多量の遺物、そして、環頭太刀柄頭の装飾に用いられた**青銅製の鍍金のある三輪**  
**（みわ）玉一〇個**を採集したことが記載されていた。



編年MT 1 5  
新池埴輪製作遺跡?

《須恵器》



剣菱形杏葉



雲珠

これらの貴重なウイリアム・ガールランドコレクションは、須恵器など土器類は取り上げられたものの、残念ながら全容は、視聴者には知られることはなかった。  
《馬具類、豪華な飾り馬の装飾品》  
・剣菱形といわれる透かしのある五角形の杏葉二個。  
鉄地金銅張り鍍銀笠鉾が撃ち込まれている。心葉形の杏葉一個。  
・鉄地金銅張りの雲珠。径九cm、高さ一・八cm、厚さ二・五mm。線刻幅一mm。そして、土地の所有者所蔵の青銅製の五鈴付馬鈴一個。

《振り文環頭大刀》

・左の図が鉄製振り文環頭把頭、直径約八cm。装飾に使われる三輪玉一〇個。下の図は、藤ノ木古墳から出土した振文環頭大刀を復元した柄頭。



後年、昭和三十四年、坊主山全体を削平して住宅地にする土地開発が計画され、それに伴って昭和後期古墳研究会が発掘調査に入った。その時、副葬品として、僅かにガラス玉数個とⅡ形式須恵器片が発掘された。しかしこの時、芝山古墳の概要が明らかになった。

・築造時期 六世紀初めを推定。

・墳形、墳丘規模 前方後円墳。全長三十m。葺石、埴輪は確認されず。築造時には埴輪円筒列が存在した。

・後円部 直径十七m、高さ二m。後円部中央に玄室

・前方部 長さ十三m最大十一m。

・玄室 奥壁側の幅三m、横の長さ三・八m。

・羨道 幅は玄門側一m、羨門側〇・八五m、高さは玄門側一・六m、羨門側一・四m。羨道全長は一・八m。

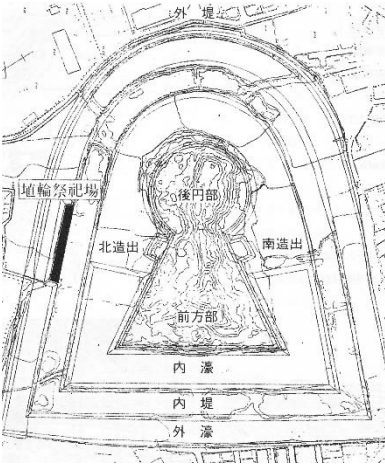
・奥壁側・玄門側ともにドーム状の持ち送りが強く、〇・五〇・六mの天井石三枚で構築。石室内部にベンガラが塗られているのは近畿としては珍しい。羨道が短く（一・六m）。関西で横穴式石室としては、塔塚

（方形墳）について最古（末永教授）。北九州では五世紀末〜六世紀前半に造られている。

芝山古墳周辺の遺跡、遺構を見ると、築造された六世紀の初めの生駒西麓には、目下遺跡があり、ここから一二歳前後の牡馬で体高約一二三〇cmの蒙古系の中型馬一一体分の全身骨格が昭和四一年に出土している。放射性炭素年代測定の結果、四世紀末〜六世紀中頃と判明。また、北方には「馬が船に乗って来た」で有名な部屋北遺跡があり、五〜六歳、体高一二四cmの蒙古系馬の骨格が出土している。また堅穴住居跡の遺構が検出され、竈や製塩土器、韓式土器などが発掘されている。

また、生駒西麓には古墳が多数築造されているが、この当時、周辺には、寺川に堂山古墳群の一号墳、五世紀後半築造で径二〇mの円墳が存在し、石切劔箭神社の宝物が副葬されていたと考えられる神並の正興寺山丸山古墳と、五世紀後半の円墳径二〇mの塚山古墳があった。なお、馬具の副葬品や金銅製環頭大刀で知られている山畑古墳群は、芝山古墳築造から数一〇年後の築造とされている。

二・芝山古墳と同じ時期築造の今城塚古墳、芝山古墳と時期を同じくして築造された古墳が摂津に現存している。それが第二六代継体天皇（五三一年没）の陵墓といわれている今城塚古墳。



今城塚古墳の概略は、

・前方後円墳。墳丘長一九〇m、全長三五〇m、後円部径一〇〇m、前方部幅一六〇m。二重の周濠がある。もともとは三段築成。**横穴式石室**。

・出土物 総数一三六以上の象形埴輪、日本最大の象形埴輪や精緻な武人埴輪。そして、三輪玉、振文環頭大刀、鏡、須恵器（MT15）など。埴輪祭祀区は、天皇陵での埴輪祭祀の実態を示すもの。

・石棺。馬門石の剝拔式家形石棺、竜山石の剝拔式家形石棺、二上山凝灰岩の組合せ式家形石棺の三基。

左の写真三枚は今城塚古代歴史館の展示品。



被葬者と考えられている  
継体天皇と振文環頭大刀、三輪玉



馬の埴輪



須恵器・編年 MT15  
新池埴輪製作遺跡

《新池埴輪製作遺跡》

五世紀中頃〜六世紀中頃までの約一〇〇年間、断続的に操業していた、日本最古最大級の埴輪生産遺跡。

三棟の大型埴輪工房と一八基の埴輪窯、工人集落（堅穴住居一五棟）などが丘陵上約二万七千㎡の発掘調査で確認され、埴輪生産システムを具体的に知ることができると。

生産された埴輪は太田茶臼山古墳（五世紀中頃）や今城塚古墳（六世紀前）といった巨大古墳をはじめとして、土保山古墳や昼神車塚古墳の三島の有力者の古墳に立て並べられている。今城塚古墳の須恵器型式は、MT・15、TK10。新池遺跡のヘラ記号の円筒埴輪とMT・15の須恵器が共存している。

七世紀の集落跡からは、新羅土器も出土していて、『日本書紀』欽明天皇一三年条にある新羅人の子孫が住むという「摂津国三島郡埴輪（はにいほ）」そのものにあたると考えられ、『日本書紀』の記述を裏付ける遺跡でもある。

三・芝山古墳の副葬品、振り文環頭大刀を考える

生駒山の西麓、標高八〇mに裾野に沿うように築造された全長三十m、二段築成の前方後円墳に数多くの円筒埴輪などが並び、威容を放つ姿を、河内湖に入ってきた人々、河内野の人々の眼にはどのように映っていたのであろうか。

芝山古墳の被葬者を考えるとき、関西では最古に近い横穴式石室に葬られているということ、また、石室がベンガラで装飾がなされ、北九州に多い持ち送り状のドーム型であるということを考慮しなければならないが、副葬品、特に埋葬年代が推定できる須恵器、豪華な装飾馬に使用されたであろう馬具、そして、威信財ともいえる振文環頭大刀に注目しなければならない。

# 《振り文環頭大刀 出土の分布》

図の●は、芝山古墳と同じく、振り文環頭大刀、MT・15の須恵器が副葬されていた二〇箇所の古墳を示している。古墳名（芝山古墳を除く）が記されている二本松山古墳、十善の森古墳、山津照神社古墳、鴨稻荷山古



墳などには、金銅製冠（広帯二山式を含む）が副葬されていた。

古墳に副葬されてきた環頭大刀の柄頭は、頭椎（かぶち）から単鳳と変化してきたが六世紀、継体天皇の時代に、楔形柄頭大刀の柄頭上部に、振りを加えた半円形の鉄製環（振環）が取り付けられ、三輪玉で装飾された環頭大刀が出現した。

この捻り文環頭大刀は、継体天皇の臣下が朝廷に参内するときに佩刀（腰に吊るして装備する）された下賜刀。また、臣下の葬儀の際の王権からの下賜刀ともいわれている。

図にある、鴨稻荷山古墳は、近江国高島郡の三尾にある臣下であり、全長六〇mの前方後円墳。二上山凝灰岩



鴨稻荷山古墳石棺

製の剥抜き式石棺に副葬品として、飾沓、金製耳飾り、振り環頭太刀・三輪玉、三葉文櫛円形杏葉などが検出されている。

高島郡三尾は、『日本書紀』継体天皇の条にある「男大迹王（おほどおう）は、誉田（ほむた・応神）天皇の五世の孫、彦主人王の子なり。母を振媛と曰す。振媛は、活目（いくめ）天皇の七世の孫なり」と記される。また、「彦主人王は、近江国高島郡の三尾の別業（なりどころ）より、使を遣して、三国の坂中井に聘（むか）へて、納（めしい）れて妃としたまふ。遂に天に天皇を産む。」と、記されており、継体天皇の誕生之地である。三尾には、彦主人王が葬られている王塚古墳がある。また、男大迹王は、高島の三尾君の娘、稚媛と倭媛を娶っている。鴨稻荷山古墳の被葬者は稚媛との第一子、太郎皇子といわれている。

なお、次いで、母方、振媛の繋がりで尾張連草香女目子媛との間に、後に第二八代安閑、二九代宣化天皇になる子をもうけている。欽明天皇になる皇子は、樟葉宮で即位し、皇后手白香皇女との間に誕生している。継体天皇五八歳の時である。『日本書紀』による）

次いで、図の山津照神社古墳は、全長四六・二mの前方後円墳。当時の倭国で重要な産鉄や鉄鋌（てつてい）などの流通に関わり、継体天皇と強いつながりがあった

た大氏族、息長氏の墳墓といわれている。なお、彦主人王、継体天皇につながる応神天皇の子、若野毛二俣王は、息長真若中媛との間に誕生している。

副葬品は、倭製の銅鏡二面（獸文鏡・五鈴鏡）、内行花文鏡、広帯二山式金銅製冠、振り環頭大刀・水晶製三輪玉、刀子、馬具（杏葉・鞍金具・鍔・雲珠など。「二重の石室」から北部九州系の内部に石室形がある横穴式石室は赤色顔料が塗られていた。

《なぜ、振り環頭大刀が芝山古墳に》

振り環頭大刀分布図の古墳に共通することは、大きさは違っても横穴式石室を備えた前方後円墳である。また、継体天皇の臣下が朝廷に参内するときに佩刀された下賜刀、または、臣下の葬儀の際の王権からの下賜刀ともいわれている振り環頭大刀が副葬されていることは、分布図にある古墳の被葬者と同じく、継体天皇に近く信頼が厚かったことを示している。



古墳研究会が調査した頃の芝山古墳

四. では、芝山古墳の被葬者は、誰であろうか。

推考するのには、次の事柄を手掛かりに考えてみたい。振り環頭大刀分布図の二〇基の古墳の中で、芝山古墳の副葬品の検出された場所に、少し違った特徴がある。それは、青銅製の五鈴付馬鈴など豪華な馬具に混じって振り文金具と三輪玉一〇個が検出されたこと。このことは、馬具が生前の被葬者にとって誇りうる重要

な遺品であり、王権内での地位や役割を示すものであったのでは、と考えられる。

『日本書紀』継体天皇の条に、河内馬飼首荒籠に関する記事が載せられている。

第二十五代天皇、武烈天皇が継嗣のないまま崩御。ヤマト王権の豪族たちは後継者を探し始めた。倭彦王（仲哀天皇の五世孫）をスカウトに向かったが逃げられる。そこで、大伴金村大臣、物部麤鹿火（あらかひ）（あらかい）大連、巨勢男人（おひと）大臣が、越前・三国あるいは近江に居た男大迹王を帝（すめらみこと）に、とスカウトに向かうが、男大迹王は悠然とした天皇の風格を以て応対し、ヤマト王権へのスカウトを頑として受け入れなかった。

そこへ、故知の間柄であった河内馬飼首荒籠が秘かに使いを出して、大伴金村大臣らの真意を男大迹王に伝えさせている。

『魏志倭人伝』によれば、三世紀の日本に馬は存在し

心を傾け命を委せて、忠誠（まめなることば）を尽さむことを冀（ねが）ふ。然るに天皇、意（みこころ）みの裏（うち）に尚疑ありとして、久しくして就かず。適（たまたま）河内馬飼部荒籠を知れり。密（しのび）に使を奉遣（たてまだ）して、具（つばひらか）に大臣・大連等の迎え奉（まつ）る所以（ゆゑ）の本意（もとつこころばへ）を述べまうさしむ。留まること二日三夜ありて、遂に発つ。

ていなかったが、前述したように四、五世紀の葦屋北遺跡、日下遺跡から写真の蒙古馬全身骨格が発掘されている。

それは、河内に宮都をおいた天皇らは、馬の飼育に必要な清水と塩が確保でき、牧草が育つ日の当たる斜面が広がる生駒西麓に、牧を定めて朝鮮半島から成馬を輸入し、飼育、生産を進めたことが推測される。その馬飼集団の棟梁が「河内郡」に居た河内馬飼首荒籠であったと考えられる。



馬飼部らは、交易や戦いがあれば共に、各地を駆け巡ったであろう。河内馬飼首荒籠が、各地の豪族の情報に精通していたとしても不思議ではない。

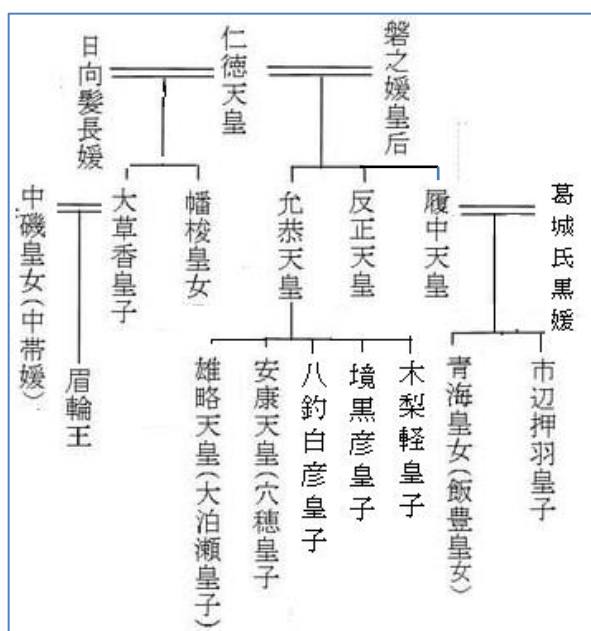
男大迹王が「尚疑ありとして、久しくして就かず」と、ヤマト王権からのスカウトを拒絶していたのは、ヤマト王権内部の抗争、なみいる政敵を一掃した雄略天皇の凄まじい策略と王権内部の混乱ぶりであった。

雄略の二代前、允恭天皇の皇后は、応神天皇の皇子、若野毛二派王（稚淳毛二俣王）の娘、忍坂大中姫で、皇子に木梨輕皇子、境黒彦皇子、穴穗皇子・後に安康天皇、八鈞白彦皇子と大泊皇子・雄略天皇がいた。

まず、木梨輕皇子が自害した。ついで允恭の父、仁徳天皇の皇子、大草香皇子が安康によつて殺される。それは、妹、草香幡梭皇女への献上品（大泊瀬皇子との結納品）、宝冠・押木珠纒（おしきのたまかつら）を根使主が搾取したことによる冤罪による。そして、安康天皇が大草香皇子の子、眉輪王に殺される。このことで、大泊瀬皇子が、葛城山（つづら）大臣の屋敷に逃げ込んだ眉輪王と兄である境黒彦皇子、八鈞白彦皇子を焼死させている（極楽寺ヒビキ遺跡）。そして、大泊瀬皇子は、

次の有力な天皇候補、市辺押羽（磐）皇子を狩猟と称して射殺し、二一代天皇として、即位した。恐怖を感じた市辺押羽皇子の子、のちに顕宗天皇、仁賢天皇となる弘計王、億計王は、播磨に逃げている。

雄略天皇は四七九年六二歳没。次の清寧天皇五年間在位没後、継嗣なく混乱（飯豊皇女、角刺宮で執政）後、顕宗、仁賢天皇三年間、十一年間在位。そして、武烈天皇が列城宮で即位。八年間在位、暴虐な天皇と描かれる。五〇六年、五七歳没。実は、出生不明、十一才即位、一八歳没説がある。（『扶桑略記』）



『日本書紀』の記事「留まること二日三夜ありて、遂に発つ。」

この時、河内馬飼首荒籠は、どのような情報を伝えたのであろうか。男大迹王は、ヤマト王権内部の権力闘争について何も知らなかったはずはない。

思い悩む男大迹王の背中を押したのは、河内馬飼首

部荒籠に間違いないであろう。雄略で途切れた皇統が、今につながる「継体」天皇の誕生であった。

五八歳になっていた男大迹王は、五〇八年二月、大和の地でなく、琵琶湖水系、淀川の沿いの樟葉宮(枚方市)で即位し、山背筒城宮(京都府綴喜郡)、そして弟国宮(京都府長岡京市)に移り、二〇年間(「一本」の注記には七年間)にして五二六年九月、大和磐余玉穗宮(桜井市)に入った。

『古事記』では、「(武烈)天皇すでに崩(かむあが)りまして日読(ひつぎ)知らすべき王(みこ)なかりき。故(かれ)品太天皇の五世の孫、袁本杼命(をほど)を近淡海国より上り坐(いま)さしめて、手白髪命(たしからのみこと)に合せて、天の下を授け奉りき」

「品陀和氣尊(応神)の五世の孫、袁本杼命、伊波礼の玉穗宮に坐しまして、天の下治らしめしき」と、ある。



樟葉宮跡・交野天神社境内が推定地

ヤマト王権の大臣、大連ら有力な豪族ではなく、「首(おびと)」に過ぎない河内馬飼首荒籠について、「貴賤(たうときいやしき)を論(あげつら)ふこと勿(なか)れ。但(ただ)其の心をのみ重みすべし」と、男大迹王の偽らざる心情が『日本書紀』に感謝をもつて書かれている。

乃(すなわ)ち喟然歎(なげ)きて曰(のたま)はく、「懿(よ)きかな、馬飼首。汝(いまし)若(も)し使を遣(まだ)して来(きた)り告(もう)すこと無からましかば、殆(ほと)ほどに天下(あめのした)に蚩(わら)はれなまし。世(ひと)の云(い)はく、「貴賤(たうときいやしき)を論(あげつら)ふこと勿(なか)れ。但(ただ)其の心をのみ重みすべし」といふは、蓋(けだ)し荒籠を謂(う)か」と、のたまう。

踐祚(あまつひつぎしろしめ)すに及至(いた)りて、厚く荒籠に寵待(めぐみたま)ふことを加ふ。甲申(きのえさる・十二日)に、天皇、樟葉宮に行至(いた)りたまふ。

このような、継体天皇との関係のあった河内馬飼首荒籠が葬られたのは、生駒山西麓の河内牧に近い芝山古墳であったと考えても決して間違いではなからう。

なお、日本の馬の飼養の導入について、『日本書紀』仲哀天皇九年十月三日条に、新羅王は…、「今から以降、天地とともに長く、降伏して馬飼部となります。船の舵を乾かさずに、春秋に馬を洗う梳(くし)と馬の鞭(むち)を献じ、また海路の遠いのをもとせず、年ごとに男女の調を貢上しましょう」と。

継体天皇二四年九月条に、「天皇は任那使の奏上を聞き……河内母樹馬飼首御狩(みかり)を、都へ参上さ

せた」とある。「母樹」は豊浦のことで、このことから、馬牧は河内国額田郡にもあったことが推測され、そして、馬飼部集団は、馬の飼養だけでなく外交・軍事面でも活躍していたことが考えられる。



また、天武天皇十二年九月二三日条に、川内馬飼造が「連」の姓を賜り、十月には沙羅羅馬飼造が「連」姓を賜った。このことで、川内(河内平野、古大和川流域)と讃良郡に居た馬飼部とは違うことが分かる。

※「天皇号」は、天武・持統朝以後に使われ、それまでは、「大王」であった。また、「継体」「天智」などの漢風諡号は奈良時代に付けられた。

※大王に仕える族長とその一族に与えられていた称号に臣・連・君・直・造・首があった。

※「大英博物館」所蔵の副葬品を是非とも見たいものである。故郷・東大阪に尿されることを切に願う。

(東大阪文化財を学ぶ会)

#### 参考文献

- ・『日本書紀』岩波文庫版 三〇巻 漢文体
- ・川島親王、中臣大嶋、田辺氏等が編纂。
- ・『古事記』岩波文庫版 日本語重視の変体漢文
- ・太安万侶、稗田阿礼
- ・『継体天皇の謎に挑む』越まほろば物語編纂委員会編
- ・森浩一 門脇貞二 等
- ・『芝山古墳の出土遺物をめぐる諸問題』
- ・大塚 初重(明治大学教授)
- ・今城塚古墳史跡公園、歴史館の展示 など